

# 学会ニュース

## 目次

・ 第32回大会について	.....	1
・ リヒャルト・シュトラウスとモーツァルト ー市民的音楽の希望と絶望		
	岡田 暁生	..... 2
・ ペローのお城と18世紀	川島 慶子	..... 3
・ グラーツ探訪	寺田 元一	..... 6
・ 事務局より		..... 8

## 第32回大会について

来年度の第32回大会は、2010年6月26日(土)、27日(日)に新潟大学で開かれる予定です。開催校責任者は逸見龍生会員です。詳細は大会プログラムで案内します。(5月半ば頃、「学会ニュース」次号とともにお届けする予定です。)自由論題は以下の要領で公募いたします。

共通論題は「趣味」あるいは「味わい」で、コーディネーターは安西信一会員です。27日(日)を充てる予定です。

レクチャー・コンサートとして、逸見会員のご尽力により、新潟に伝わる古浄瑠璃の上演が実現する予定です。どうぞお楽しみに。

### 自由論題公募要領

第32回大会で発表を希望される会員は、1000字以内の発表要旨をつけて、3月16日(火)までに学会事務局までお申し込みください。要旨はプリントアウト原稿のほか、「ワード」ファイルまたはメールでお送りください。

発表は1件につき50分、うち報告が40分、質疑応答が10分の予定ですが、申込者が多数の場合は、個々の発表の時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野のバランスなどを勘案して、調整ないし選考させていただくこともありますので、この点あらかじめご了承くださいませようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっています。

詳細はプログラムが決定次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

## リヒャルト・シュトラウスとモーツァルトと

### 一 市民的音楽の時代の希望と絶望

岡田 暁生（京都大学）

《カプリッチョ》というリヒャルト・シュトラウス（1864－1949）最後のオペラがある。舞台はフランス革命直前のパリ。ここでは美しい伯爵令嬢に求愛する詩人と音楽家の姿を通して、いわゆるWort oder Ton (prima le parole o prima la musica)の問題をめぐる哲学談義が繰り広げられる。グルック論争以来なじみの、「オペラの主役は音楽なのか言葉なのか？」という主題である。さしてドラマティックな出来事が起きるわけでもないこのオペラは、シュトラウス自身そう考えていたような「オペラについての論文」とも言うべき性格の作品であり、ジャンルの的には一八世紀に流行した幕間劇（インテルメッツォ）に近い（よく知られたサリエリの《ハジメニ音楽アリキ》などはその典型であり、事実このサリエリ作品は《カプリッチョ》のモデルの一つとなった）。

この優雅にして思弁的なオペラにシュトラウスは、筆舌に尽くせない、儂くも美しい音楽をつけている。《バラの騎士（1911）》や《ナクソス島のアリアドネ（1912）》以来なじみの、モーツァルト風の室内乐的なテクスチャーを、さらに蒸留して透明なエッセンスだけにしたような響きとえばいいだろうか。その空中を漂うような軽やかさ、明朗な微笑みと諦念、そして余分なパトスを徹底的に取り除いた抒情は、それこそモーツァルトの晩年作品にも比肩する美しさだと言って過言ではないだろう。

聴く者を夢幻境に誘うこの作品をシュトラウスが書いたのは、第二次大戦の只中である。《カプリッチョ》がミュンヘンで初演されたのは一九四二年十月二八日。既にナチス・ドイツにとって戦況はかなり悪化していたが、毎夜のように人々はこの作品を観るため劇場につめかけたという。しかしながら、「次のオペラを書きましょう！」という台本作者クレメンス・クラウス（クラウスはモーツァルトやリヒャルト・シュトラウスの演奏に定評があった名指揮者である）の誘いを、シュトラウスは「人は誰も一つしか遺言は書けないものです」という表現で断る。《カプリッチョ》を初演したバイエルン国立歌劇場は、翌一九四三年に連合軍の空爆で全壊。いみじくもこのオペラは、シュトラウスだけでなく、この栄光の歴史 — モーツァルト《イドメネオ》やワーグナー《トリスタンとイゾルデ》と《ニュルンベルクの名歌手》はここで初演された — を持つオペラ劇場にとっても、いわば「辞世の句」となった。

《カプリッチョ》のおよそ浮世離れた透明な美しさは、モーツァルト作品の多くがそうであるように、崩落していく一つの世界に対する絶望的なポリフォニーとしてののみ、理解できる性質のものだろう。ワーグナー以後のドイツにおける最も傑出した作曲家として、世紀転換期の音楽界における寵児だったシュトラウス。かつて帝国主義／ニーチェ的な物量作戦と「力の崇拜」の音楽的シンボルだったシュトラウス。そして同時に、非常に熱烈なモーツァルティアンでもあったシュトラウス。その彼はまた、最晩年において、モーツァルトと同じくアンシャン・レジーム世界の住人となる運命にあった。暗黒の戦争とアウシュヴィッツの時代に書かれた《カプリッチョ》は、一八世紀から差してくる残照でもってかろうじてまだ輝くことの出来る、死にゆく星のようなものかもしれない。

とはいえ、歴史状況という点でシュトラウスの晩年は、モーツァルトのそれよりさらに絶望的であったとも想像される。モーツァルトが生きた時代は、一つの時代の終わりであると同時に、新しいその始まりでもあった。《ドン・ジョヴァンニ》がアンシャン・レジーム世界の終焉を告げる作品だとすれば、同時にモーツァルトは《魔笛》で新時代を予告することも出来た。だが最晩年のシュトラウスは、まさにモーツァルトの時代とともに始まる市民的音楽文化の伝統が、完膚なきまでに破壊されていくのをなすすべなく見守るよりほかなかった。彼の数々の大傑作が初演されたミュンヘンのバイエルン国立歌劇場、ドレスデンのシュターツカペレ、ウィーンの国立歌劇場はすべて第二次大戦中に空爆で破壊され、シュトラウスを悲しみのどん底に陥れたと言われる。モーツァルト的「希望」は、シュトラウスの晩年作品には存在しない。

シュトラウスをはじめとする後期ロマン派音楽の研究から出発した私にとって、これまでモーツァルトこそが常に最も気になる作曲家であり続けてきたとしたら、それは両者を重ね合わせてみることで、一八世紀末に始まり二〇世紀のどこかで終焉を迎えたある時代の「希望」と「絶望」とが、そこから端的に浮き上がってくると思えるからかもしれない。

## ペローのお城と18世紀

川島慶子（名古屋工業大学）

「私の叔母のことを書いてくださってありがとう」フランスから、封筒に差出人の名がない、これだけの文章の手紙が来たのは今から10年以上前の秋のことだった。「叔母?」「誰のこと?」フランスの18世紀科学史の研究者である私が、今私に手紙を出すことのできる、誰かの叔母さんの研究をしているはずがない。ましてやそれがフランス語で書かれた文章を指しているなら、絶対にありえない。私はあっけにとられてしまった。

しかし冗談にしてはおかしい。もういちど念入りに封筒を見ると、差出人の名前はないのだが、住所が印刷してあった。イヴリーヌ県、ショワズール谷、ブルトウイユ城。ブルトウイユ?その名前になら覚えがある。私が修士論文以来研究している、デュ・シャトレ侯爵夫人の結婚前の姓である。もしかしてブルトウイユの子孫? 貴族なら城を所有していても不思議ではない。それにしても、200年以上前の人に「私の叔母」とは。

ちょうど12月にフランス行きを計画していたので、その旨を書いて返事をした。そして予想通り、この手紙の主はデュ・シャトレ夫人 (Gabrielle-Émilie, Le Tonnelier de Breteuil, marquise du Châtelet : 1706-1749) の実家の方の子孫、現在はフランス個人城主協会の会長であるアンリ・ブルトウイユ侯爵だったのである。侯爵は私を城に招待してくれることになり、12月のある日、私はパリの中心部から、郊外列車RERのB線の終点サン・レミー・レ・シュヴルーズ駅に向かったのである。

駅から侯爵の車に乗って城に向かうが、かなりの距離がある。18世紀だったら馬車しかないの

だから、パリから、あるいはヴェルサイユからここにくるのは一仕事だ。「領地は減ってしまい、現在は1000ヘクタール」とのことだが、私には境界が全然わからない。ただ、そういうところに住むと、郵便が建物としての家（領地の端にあるわけでないので）に届かないという、とても信じられない話を聞かされ、広いというのは大変だと思った。もはや召使のいない侯爵は、村の郵便局に局留めになっている郵便をとりにはいかなければならないのだ。私を迎えに来てくれたときも、郵便局に寄ってから城に帰ったのである。

さて、ルネサンスに先祖が立てたというこの城は、上から見るとコの字型になっており、庭園も中もすばらしく美しい。じつはここは誰でも見学できる。城と庭園を維持するために、侯爵は文化庁の援助を受けて、ここを年中無休の博物館にしているからである。日本語のホームページもあって、<http://www.breteuil.fr/ja/accueil.php>で仔細を見ることができる。

この城の売りは、先祖の一人がかのシャルル・ペローの友人であったことから、「ペローの城」としての側面である。訪問する人々をまず迎えてくれるのも、「長靴をはいた猫」の巨大な人形だ。城の中にも、庭園にも、ロウ人形による「眠りの森の美女」や「青髭」などの場面の他、さまざまなヴァージョンの猫の人形が、いたるところでわれわれを楽しませてくれる。

18世紀研究家にとって興味深いのは、ブルトウイユ家の歴史の中でもっとも有名な人物が、ルイ16世時代の高官だったブルトウイユ男爵（Louis Auguste, le Tonnelier, baron de Breteuil : 1730-1807）であることから、18世紀に関するさまざまなものがこの城に展示、所蔵されていることだ。それは本に限らず、外国の大使を長い間務めたこの男爵に贈られた、当時の各国元首からの贈り物など、多岐にわたっている。特にマリア・テレジアから贈られた「ヨーロッパのテーブル」という、宝石をちりばめた豪華なテーブルは、侯爵によると「城と領地すべてよりも高価」とのことで、まさに圧巻である。

また、このブルトウイユ男爵はかの首飾り事件の時に宮内大臣だったので、ルイ16世がロアン大司教の逮捕状を書いて、男爵に命令しているまさにその場面が、ロウ人形によって再現されている。国王の正面に居るのは、伝記作家ツヴァイクによれば、事件の直接的「被害者」にして、間接的「加害者」であった王妃マリー・アントワネットである。さらにオリジナルではないが、問題の「王妃の首飾り」のレプリカも展示されている。これを見ると、それはいわゆる日本語の「首飾り」に相当するもの（つまり首から下げるもの）ではなく、ドレスの胸あてに縫い付けて着用する巨大なアクセサリであることがわかる。盗まれたオリジナルは、金額にして軍艦二隻分に相当したと言われているが、夥しいダイヤの列をみると、さもありなんと思われる。それはもう、美しいというより、巨大というほうが際立っていて、この頃には自然主義に傾倒していたマリー・アントワネットが好みそうな代物ではない。

そして肝心の侯爵の「叔母」（本当は18世紀のブルトウイユ男爵の叔母だが）である、デュ・シャトレ侯爵夫人に関連した展示室もある。夫人の代表的著作『物理学教程』も展示してあるが、ここで一番美しいのは、侯爵夫人の若いころの肖像画だ。恋人だったヴォルテールが死ぬまでフェルネーに飾っていたものとは別の趣を持つ、やはりコンパスをもった若々しい「麗しのエミリー」の面影を今に伝えてくれる逸品である。ちなみに、2006年にフランス国立図書館で「デュ・シャトレ夫人展」が催され、さらに女性学研究所としての、エミリー・デュ・シャトレ研究所が設立されたことにより、最近は甥よりこの叔母の知名度が上がってきたので、彼女の展示は昔よ

り充実してきている。

また、19世紀にもかかるが、世紀末に行なわれたナポレオンのエジプト遠征の記録を集めた『エジプト誌』のオリジナル版も展示してある。しかも城にあるのは、王政復古期の国王がじきじきにブルトウユ家の当主に送った特別版で、見事な彩色のエジプトの建造物や動植物の絵がとりわけ美しい。

こうしてブルトウユ侯爵夫妻との付き合いがはじまり、私はその後もたびたびこの美しい城におじゃますることになった。それは、普段は書かれたものだけで18世紀と接している私のような研究者に欠けている、「モノ」との接触をもたらしてくれる貴重な機会となっている。というのも、さきの首飾り事件の「首飾り」などの例に顕著だが、文献だけではその意味が把握できないものが多々ある。しかしなかなか実物にはお目にかかれないので、われわれはやむを得ずそこを素通りしてしまう。けれども、やはり「モノ」に触れたかどうかで、われわれの持つリアリティはずいぶん変わってくる。

これはブルトウユとは直接関係ないが、最近18世紀ヨーロッパの衣裳に触れる機会があった（「18世紀 麗しのロココ衣裳展」神戸ファッション美術館、2007；「祝祭の衣裳展、ロココ時代のフランス宮廷を中心に」目黒区美術館、2009）。これは男性衣裳を含む30点以上の実物の展示という、世界でも例を見ない18世紀衣装の展示であり、18世紀前半から帝政期までをカバーする画期的な展覧会であった。わたくしはヴァトーやフラゴナールらの絵画に描かれている、ローブ・ア・ラ・フランセーズなるドレスの構造、とくにマントとスカートの関係が長い間不明だったのだが、この展覧会でやっとその意味がわかった。また、18世紀末から19世紀初頭の有名な教育家ジャンリス夫人が「ポケットにあらゆるメモを詰め込んでいた」という逸話の意味も本当には理解できていなかったのだが、この展示でポケットの位置が確認できた。18世紀のスカートのポケットは、現代のものよりずっと大きく、本当になんでも「詰め込める」のだ。やはり「百聞は一見にしかず」なのである。

ここでお城に戻ろう。この、ルネサンスから現代までの貴重な品々を展示しているブルトウユ城を維持するために、侯爵夫妻はそれこそ年中無休で働いている。何度か受けた招待の中で、わたくしは貴族の社交の伝統を垣間見た。文化庁からの援助だけでは、城を美しく維持し、新しい展示を企画してリピーターを確保するには十分でない。侯爵夫妻は日本の企業も含め、さまざまな組織との交渉を重ねている。当然語学にたけており、侯爵は非常に流暢な英語を話す。じつは侯爵の祖母は元アメリカの富豪の令嬢なのだ。つまり19世紀末のブルトウユ侯爵は、アメリカ女性と結婚して家に繁栄をもたらしたのである。これは当時、少なからぬフランス貴族の跡取りが選んだ道であった。

伝統を背負って生きるということはどういうことなのだろう。もし自分の家に「徳川家康からもらった机」や「伊能忠敬が使った本」などがあったら、もうそれは相続人個人のものではない。過去と未来、自分たちはそれをつなぐ位置に立っているのだと侯爵夫妻は考えているのだろう。18世紀研究でよく言われることだが、ヴォルテールの手紙には現代で言うところの私信はなく、また大抵の18世紀フランスの上流社会の手紙にも私信はないとされている。しかし私には、これは18世紀だけのことではなく、現在のブルトウユ侯爵夫妻の生活にも、こうした意識の流れが存在しているように思われる。フランス人は個人主義で日本人はそうではないとは日本での通説

だが、日本語の「個人主義」が意味するものは、じつはむしろ今の日本人そのものに当てはまるのではなかろうか。わたくしは、先祖の建てたペローの城の維持発展に情熱を傾けている侯爵夫妻をみながら、公と私とは分かちがたく繋がっているのだといつも思い知らされるのである。

残念なことに侯爵夫人は2009年10月に他界された。ここにご冥福をお祈りするとともに、夫人がこの城に残した情熱が、次の世代に受け継がれていくことも心よりお祈りする。



## グラーツ探訪

寺田元一（名古屋市立大学）

今年に国際執行委員会がオーストリアのグラーツで開催された。2011年の国際18世紀学会の大会が当地で開かれることから、おそらくヨーロッパ人にもあまり知られていない、人口24万人のオーストリア第二の都市を、国際執行委員会のメンバーに知ってもらう意味も兼ねての開催である。1586年に創設された大学はケプラーも教えたことがある由緒ある大学で、学生数は4万人を数える。

私は名古屋からルフトハンザ航空を使ってフランクフルト経由でグラーツに飛んだ。飛行機の便はあまり多くはないが、日本からはフランクフルトやウィーン経由で飛ぶのが便利なようだ。フランクフルトでの乗り継ぎ時間は1時間以上あったが、ドイツは手荷物検査が厳しく時間をとられるので、結局一番最後にグラーツ便に乗るハメになる。しかし驚いたのは、日本人観光客が多数乗り込んでいたこと。だが、彼らの目的地はグラーツではなくその先にある。スロベニア、クロアチア、ハンガリーなどの国々をめぐるツアーがグラーツからスタートしグラーツで終わるのだ。

そんな日本人観光客を後に残し、空港からバスで中心部に向かう。このバスはとても便利。終点のグラーツのヤーコミニ広場まで30分弱。そして、この広場から必要に応じて宿泊地へと移動する。そこは町の中心部に近く、いくつものトラム、バスが通過する交通の要所だ。しかもありがたいことに、空港からのバスのチケットでそのままトラムにもバスにも乗り換えできるのだ。

私はふだんは学生寮として使われているところに泊まった。バスもトイレも部屋の中に付いていて大きな不便は感じないが、部屋でインターネットと電話が使えないのが難点。インターネットはそれ専用の部屋でメールチェックなどできるが、日本語は読めない。もし大会で学生寮に泊まる場合は要注意だ。

私の場合、ルフトハンザが名古屋からフランクフルトへ週に5便という不規則な飛び方をしていることもあって、最初に想定したよりも長くグラーツに滞在せざるを得なかった。おかげでこの古都を他の参加者より念入りに探訪できた。

グラーツで第一に印象に残ったのは、水である。アドリア海に近いが気候的には地中海性ではなく、温帯湿潤性気候のようである。地中海性気候の土地のように乾燥しておらず、水が町中を豊富に流れ、そのおかげで郊外には緑が生い茂り、農業も発達している。その水の代表が町のほぼど真ん中を北から南に奔るムール川である。川幅はたった30メートルほどだが、オーストリア・アルプスの雪解け水を集めて、9月でもまだかなりの量の水が岩にぶつかりながら奔っている。

その川の左岸＝東側に広がるのが、1999年に世界文化遺産にも登録されている旧市街と城山である。連合軍の空爆を受けて新市街は焼け野原になったが、旧市街は爆撃を免れ、おかげで17、18世紀に造られた多数の歴史的建造物が、町の中心部に残されている。そのランドマークが市役所＝ラートハウスで、そこへと通じるヘレンガッセが軸線となっている。その通りと市役所前広場にはいくつもの路線のトラムがいつも行き交い、レストラン、カフェ、みやげもの屋、文化施設などが、通りの両側やその周辺歩いて5分以内のところに集中している。

お奨めの文化遺産は多数あるが、その前に、ヘレンガッセに交わる狭い路地をテラスとして利用しているレストランやカフェを紹介しておこう。夏の暑い日に涼を求めるのに最適な空間であり、朝から晩まで多くの地元の人で賑わっている。散策に疲れたら、ここでゆったりと一服する。18世紀的空間の中にタイムスリップして贅沢な時間を満喫できる。

さて、旧市街の見るべき施設としては、まず州庁舎＝ラントハウスがある。こちらは比較的新しい市役所とは異なり、16、17世紀に建てられた建物で、中庭や建物の中（廊下や階段）を自由に見学できる。現在でもさまざまな州機関が部屋を利用しており、保存状態はいい。ルネサンス様式の回廊や彫刻が特にお奨めだ。次に奨めたいのが、霊廟＝モズレウム。これは神聖ローマ皇帝フェルディナンド2世のお墓であるが、初期バロックを代表する教会風の建物で、バロック風の彫刻や壁画、天井画で埋め尽くされている。まだまだ紹介したいところはたくさんあるが、書き切れない。

そんな旧市街散策に飽きて本格的散歩をされたい向きには、城山に登られることを奨めたい。グラーツの名前の由来ともなり、中世からこの交通の要所を守ってきたのが、この城山である。登り方は三通り。徒歩、エレベーター、ケーブルカーである。私は徒歩で登った。岩壁の階段を使えば、10分もかからないで上の巨大な時計塔まで登れる。城山に穿たれたかつての防空壕を通過して裏から登る手もある。時計塔が町のシンボルともなっており、町のどこからでも見えるよう

に町並みは構成されている。砦はナポレオン戦争のときに解体され残っていないが、時計塔は残った。ただし、グラーツ市民の名誉のために言うておこう。砦はけっして陥落したわけではない。1809年、今から200年前にナポレオンの大軍に長期間包囲されながら、見事に小部隊で守り通されたのだ。だから、その英雄の彫像が城山の頂上にはある。その意味でも、ここはグラーツ市民自慢の記憶の場所なのだ。城山からはグラーツの町が一望できる。

最後に郊外にあるエッゲンベルク城を紹介して擱筆したい。これも17世紀に建てられたバロック様式の城であり、占星術にしたがって建物の構造が四季、12ヶ月、365日を表している。中には美術館、博物館もあり、近世美術のなかなか充実したコレクションを展示している。なかでも日本人に興味深いのは、近年発見された豊臣期の大坂を描いた大坂図屏風である。その縁で、つい最近大阪城と姉妹城提携した。この屏風については10月31日にNHKがBSハイビジョンで特集を放送したので、それをご覧になった会員もいるかも知れない。

以上、人口24万という中都市だが、町も大学も古い歴史を持つ由緒あるグラーツは、見どころでいっぱいである。国際大会とともにこうした文化に触れるためにも、是非2011年にはグラーツに足を運んでもらいたいものである。ちなみに例のシュワちゃん（現カリフォルニア知事）も、なんとこの町出身だそうだ。



## 事務局より

### 業績アンケートについて

『年報』に会員の研究業績を掲載するため、例年この時期にアンケートを行っています。同封の用紙の要領に従って、の回答をお願いします。締め切りは2月末です。データの整理のため、早めにお返事いただければ幸いです。よろしくお願いします。

### 2011年グラーツ大会情報

国際18世紀学会の第13回大会は2011年7月25日（月）から7月29日（土）まで、オーストリアのグラーツで開催されます。

大会関連のサイトがすでに開設されています（[www.18thCenturyCongress-Graz2011.at](http://www.18thCenturyCongress-Graz2011.at)）のでご覧ください。

なお、開催地の関係上、国際18世紀学会の2つの公用語（英語、仏語）のほか、今回はドイツ語でも発表できるようです。

日本からも多くの会員が参加されることを期待します。

### 国際18世紀学会の名簿について

今まで、国際18世紀学会の名簿は各国学会やヴォルテール財団を通じて更新されていましたが、



今では各会員が自分で変更を入力する方式になっています。新入会員の方、連絡先等に変更のあった方は必ず自分でご自分のデータを更新してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。(画面上部のISECS-Directというボタンをクリックすると名簿にアクセスできます。)

なお、国際18世紀学会からの通知はメールで届くことが多くなっているので、なるべくご自分のメールアドレスを登録しておいてください。

### 投書欄について

この「学会ニュース」に投書欄を設けることにしました。2つの欄を予定しています。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

### 共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。(ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。)

### 学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。(編集の都合上、4月号は1月末までに、9月号は6月末までに、12月号は9月末までにご希望をお寄せください。)

### 年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、ホームページ「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

### 会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費の未納分のある方には、滞納年数に応じた払い込み用紙を同封させていただきます。前回、前々回の学会ニュース他でもお知らせいたしましたが、会費の納付率が相変わらず極めて悪い状況です。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、事務局の移転にともない、新しい郵便口座を開設しました。番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

旧事務局（東大美学研究室）の口座は廃止されたので、その番号が印刷された以前の振込用紙はもう使えません。

### 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

### 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくごお願いいたします。

### メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、井田尚、伊東貴之（東アジア交流担当）、王寺賢太（国際幹事）、小田部胤久、笠原賢介、川島慶子、小穴晶子、関谷一彦（常任幹事、年報担当）、田邊玲子（常任幹事、年報担当）、寺田元一（国際学会執行委員）、長尾伸一（東アジア交流担当）、中山智子（常任幹事、総務・会計）、服部典之（常任幹事、年報担当）、堀田誠三、増田真（代表幹事）、吉田耕太郎（常任幹事、年報担当）

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第62号 2009年12月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田（仏文）研究室

e-mail: [jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp)

tel. / fax: 075-753-2766

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>